ったが、木造建物であったこともあり、旧地表面をならす程度で、本格的な掘削には至らなかった。

以上、豊島岡墓地内の調査においても遺構は検出されなかった。今回の調査の対象区域は貞明皇后の大喪儀や秩父宮雍仁親王などの皇族の葬儀の際にも、関係施設が敷設された箇所であり、明治以降幾度となく掘削や盛土がなされた場所でもある。今回の調査においても、このことを再確認しえたことが大きな成果であろう。

以上の結果、工事は予定どおり施工した。　（福尾正彦　佐藤利秀）

智成親王墓下水道工事箇所の立会調査

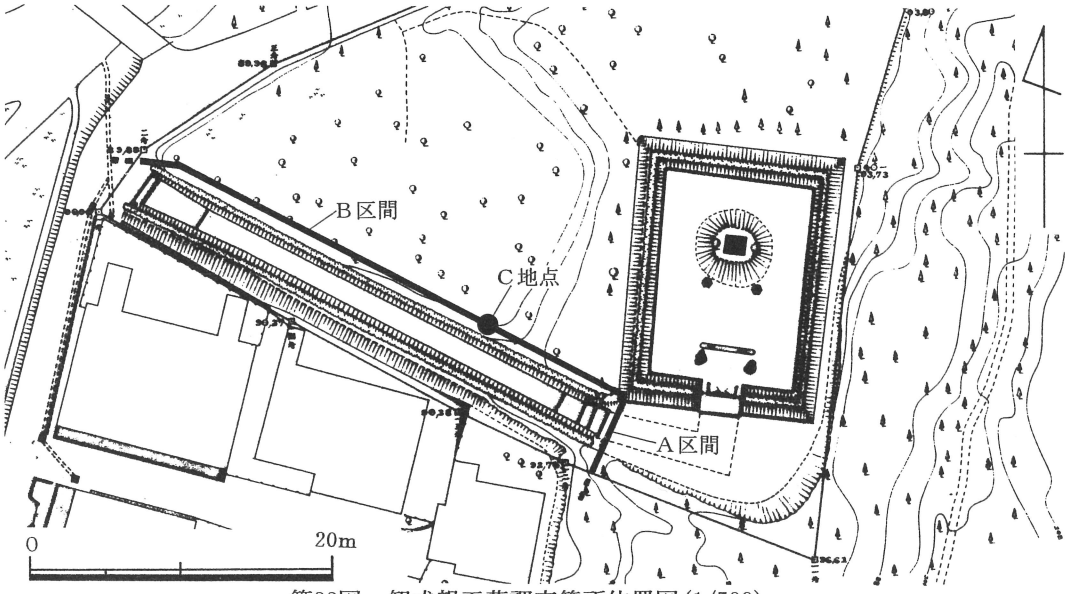
比叡山と如意ヶ嶽の間に発した白川は、山間を抜け出て丸山の山麓を大きく迂回し、北白川扇状地を形成する。その丸山の西麓に、北白川宮初代の智成親王の御墓が位置する。丸山の西裾部は道路や民家、さらには本墓のために数段の崖状を呈しており、その壁面には花崗岩や硬質砂層（バイラン土）が露呈している箇所もある。本墓付近では縄文土器等は採集されていないが、現在の白川が南流するその西側では、縄文各期の遺跡が立地し、北白川遺跡群を構成している。

この度、智成親王墓地内に公共下水道管渠を設置することとなり、平成13年９月４日～８日、その掘削に立ち会った。本墓では昭和59年３月の参道石張工事に伴う立会調査（本誌第36号）の際などに、布目瓦や近世土師器の出土が報告されていることもあって、事前に京都市下水道局、および京都市文化市民局埋蔵文化財調査センターと十分な協議のうえ、調査を実施したものである。調査に際しては、同センター長谷川行孝技師に種々ご教示を賜った。記して感謝する次第である。

公共下水道管渠は参道を上がったところ、つまり陵前の西側約４ｍ（Ａ区間）を横断し、ほぼ直角に曲がって参道北側の小土堤の内側に沿った約35ｍ（Ｂ区間）の区間に設けることとなった。その幅は約１ｍ、深さは最大で約2.3ｍである（第22図）。

調査の結果、表土（Ｉ層）下は瓦礫に近世の土師器や陶磁器を混えた盛土（II層）となっており、一部で非常に堅い灰褐色バイラン土の地山（III層）が認められた。地山が確認されたのはＢ区間のほぼ中央部と西端部分のみで、その上面には掘り込み等の遺構は確認されなかった。地山はＢ区間の中央部が最高所となっており、白川方向に緩やかに下降する一方、丸山方向にもわずかに傾斜している。つまり、地山の確認範囲に制約はあるものの、当域の東側は窪地もしくは平坦に近い地形を呈していたことがうかがわれ、包含遺物から近世（おそらくは18世紀）以降、智成親王が当地に斂葬される明治５年（1872）１月29日までに大がかりに盛土されたと考えられよう。この盛土の上面には、掘込み等の遺構は確認できなかった。Ｂ区間の中央東側部のIIａ層とした層位の下面は、他の部分に比べて黒味が強くなっており、旧表土面であったとも考えられる（第23図）。

出土品としては、土師器、陶器・磁器、瓦の破片72点である。 このうち、もっとも多いのは



第22図　智成親王墓調査箇所位置図(1/500)

瓦25点で、次いで陶器・磁器、土師器が占める。

土師器（第24図１）

３点出土している。いずれも小片で、１を除き、器形も明らかではない。

皿　１は口縁部から体部にかけて残存している。上半部は回転ナデを丁寧に施しているが、下半部は雑な調整で仕上げている。内面の底部と体部の境には顕著な沈線が認められる。18世紀後半までには位置付けられる資料であろう。

陶器（第24図２・３）

椀・皿・擂鉢等がある。

椀　２はわずかに口縁部を外反させた灰釉の美濃の製品である。

皿　鉄釉のかかった、がっちりとした高台を有する肥前産の大皿の底部がある。

擂鉢　３は全体の約１／８残存しているが、底部は残っていない。回転ナデにより仕上げた口縁部は直立し、体部との間には明確な沈線を持つ製品である。丹波産。

磁器（第24図４・５）

碗や皿が多くを占め、他に徳利・クリーム瓶などがある。そのほとんどは肥前産のものである。

碗　４は器高のあまりない染付碗である。見込みに蛇ノ目釉ハギが認められる。

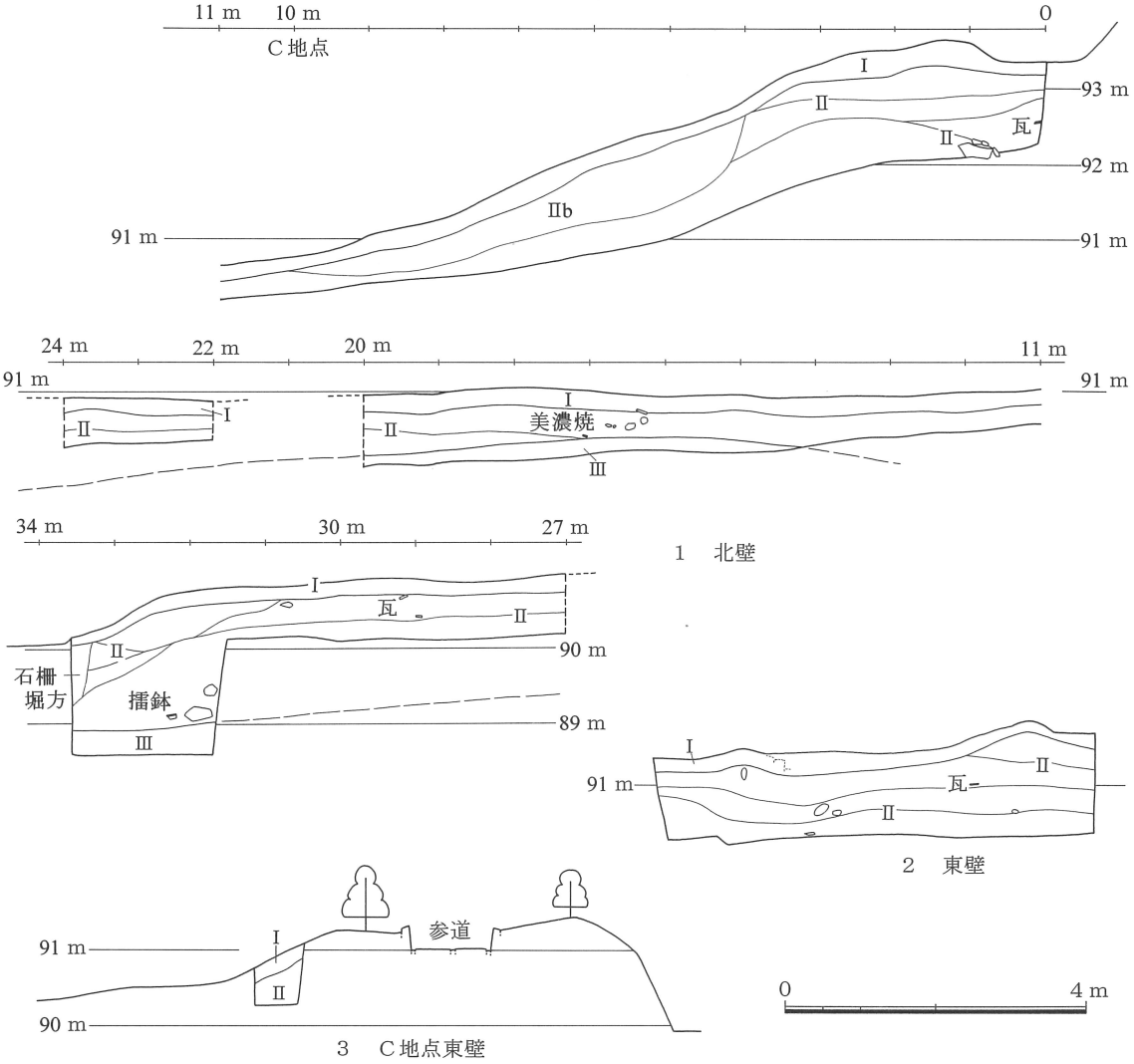
皿　５は内外面に草葉を中心とした文様が、また高台内には渦福字銘がある。

他には、「JAPAN 6123 BALBOA」の銘のある受皿、高台内に「冷泉□□」の銘のある小坏、底部付近が大きく括れた御神酒徳利などがある。

瓦（第24図６・７）

軒丸瓦、丸瓦、軒平瓦、平瓦、桟瓦、棟込瓦（輪違い）がある。黒く燻したいわゆる燻瓦も認められる。燻瓦は厚さ1.5cm前後の比較的薄手のものが多いが、灰色や赤褐色を呈する丸瓦や平瓦には厚さ2.5cmを越えるものがある。叩きによって調整している製品は認められない。

軒丸瓦　１点出土している。６は暗灰褐色を呈する。三巴文と珠文の間には円圏を巡らせるも



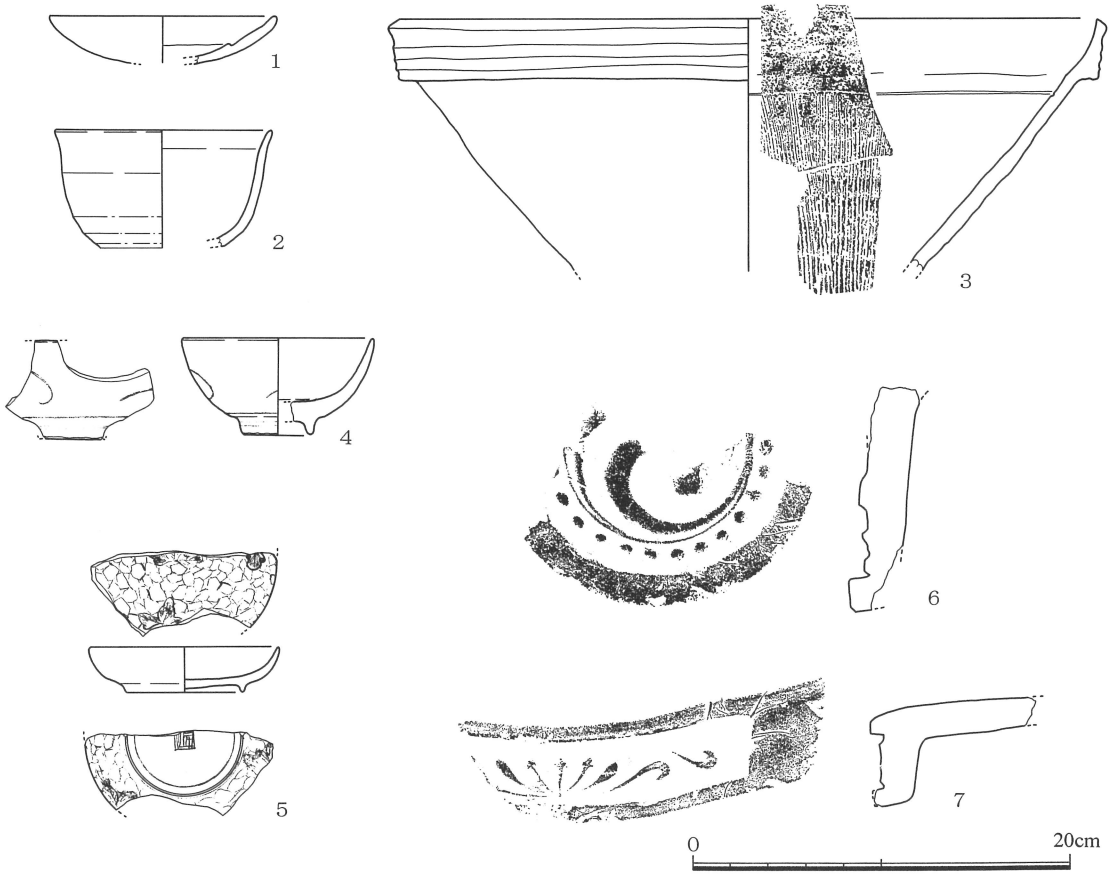
第23図　智成親王墓調査箇所断面図（1/100）

ので、巴の長い尾と円圏が接している箇所もある。

丸瓦　短い玉縁を有するものがある。

軒平瓦　燻瓦が１点出土している。７は３本単位の中心飾と上下に展開する唐草、および子葉１単位で構成される製品である。周縁部分には面取を行っている。

工事は、予定どおり施工した。　（福尾　正彦）



第 24 図　智成親王墓出土品実測図(1/4)

磐衝別命墓外構柵改修工事箇所の立会調査

垂仁天皇皇子の磐衝別命墓は、石川県羽咋市川原町に磐城別王墓とともにあり、現在羽咋神社に隣接している。両墓については、平成10年度に鳥居の改築工事箇所の立会調査が行われ、その結果は本誌第51号に報告したところであるが、この度、磐衝別命墓の外構柵と鉄扉が改修されることとなった。施工予定地内の掘削に伴い、遺構・遺物の有無を確認するため、平成12年９月18日から22日の間、本部職員と監区職員による立会調査を実施した。

境界沿いの施工地に、長さ0.6×幅0.6m×深さ0.5～0.6mの基礎埋設坑40箇所が、壺掘りされた。そのうち、土層の特徴などから、13箇所について実測を行い、４箇所分（A～D地点）を図示した（第25図）。各箇所とも土層の状況はほぼ同じである。土層は３層（Ⅰ～Ⅲ）に分けられた。Ⅰは表土で腐植土層である。Ⅱは、礫やコンクリート片を含んでおり、境界沿いにめぐる側溝を設置した際の掘形埋土と考えられる。Ⅲは褐色砂質土で、Ⅱに比べても軟らかいことから、当墓の墳丘斜面からの流出土と考えられよう。遺構・遺物は検出されなかった。

以上の結果を踏まえ、工事は予定どおり実施した。　（清喜裕二）